〔学術論文〕

『ボヴァリー夫人』における語られる身体
―エンマの身体描写に見られるジェンダー意識に着目して―

The Narration on *Madame Bovary's* Body
― A gender-conscious description of Emme's body ―

野田（水町）いおり
Iori Noda (Mizumachi)

要旨：

本論文は、ギュスターヴ・フロベール著『ボヴァリー夫人』を取り上げ、主人公エンマに向けられた視線の中にどのようなジェンダー意識が存在するのかを分析し、エンマの身体描写を通じて、小説の背景である七月王政期における女性の身体に対するジェンダー意識を解明することを目的としている。

エンマを見る男たちのまなざしを調べてみると、シャルルは「妻」として、ロドルフは「遊び相手」として、レオンは「理想的な天使のような女性」としてエンマを類型化し、ステレオタイプの女性観の中に位置づけようとしていることが分かる。男たちの視線は、エンマを「自分たちの見たいように見る」という身勝手なものでありエンマの身体を拘束するものである。つまり、男たちのエンマに向ける視線は、七月王政期の男性優位の社会規範を体現しているのである。

しかしながら、エンマは男たちのまなざしによる拘束から逸脱しようとする。多くの女性たちが男性の視線にさらされ、評価される客体にしかすぎなかった社会規範の中にあって、エンマは自らを類型化しようとする男たちの視線を受容するだけの女ではなかったのである。エンマは男たちの視線がもたらす閉塞感から逃れようと葛藤し、男性優位社会に挑戦し、結果として失敗した。エンマの挑戦が悲劇的な結末を迎えたのは、当時の社会における女性の挑戦の限界を示すものだろう。

本稿における男たちの視線の分析を通じ、『ボヴァリー夫人』は、「七月王政期の社会通念や男性優位の規範を内包した男性たちの視線の拘束からの解放に挑戦し、失敗した一人の女の物語」という新しい読み方を提案できるのではないだろうか。

キーワード：『ボヴァリー夫人』　視線　身体描写　ジェンダー　社会規範　七月王政

テクストはアルベール・チボーデ（Albert Thibaudet）とルネ・デュメニル（René Dumesnil）編集によるプレイアッド版全集の第１巻を用いた。（OEuvres complètes de Gustave Flaubert, "Bibliothèque de la Pléiade", Gallimard, 5 vols, 1983.）本文中の引用はそのページ数のみを記す。なお、日本語訳の下線は、筆者が強調のために記したものである。

本論文では、ギュスターヴ・フロベール[1]著『ボヴァリー夫人』[2]を取り上げ、主人公エンマの身体描写を通じて、小説の背景である七月王政期における女性の身体に対するジェンダー意識を分析する。

『ボヴァリー夫人』は、ロマンティックな甘い感傷と夢のような結婚生活に憧れて田舎医者シャルルと結婚した主人公エンマが、すぐに単調な現実生活と夫の凡庸さに幻滅し、満たされない感情に身を焼かれ、甘い夢を追って不倫をし、借金を作り、最終的には服毒自殺をするというストーリーを描いたものであり、19世紀のフランス文学を代表する傑作である。

作者であるフロベールは、ドラマール事件を着想として『ボヴァリー夫人』を執筆した。ドラマール事件とは、フランス北西部の町ルーアン近郊にあるリーという村の開業医ウジューヌ・ドラマールの妻デルフィヌが不貞を働き、借金を苦に自殺した事件のことである[3]。当時、ドラマール事件は、その不道徳な事件の内容から世間を大きく騒がせた。また、『ボヴァリー夫人』自体も、1856年に出版されるやいなや、「不倫をした末に自殺をする妻の物語」というスキャンダラスな内容が、反宗教、社会風俗を乱すという理由で出版をめぐり裁判になっている[4]。これらの事実を通して、当時のフランスにおいては、女性の不貞に対しては男性のそれとは比較にならないほどの厳しい目が向けられ、女性の不道徳が社会の激しい批判の対象となっていることが容易に想像できるだろう。

そもそも、『ボヴァリー夫人』の時代背景となった七月王政期の社会的特徴の一つとして、保守的で家父長的な男性優位の社会規範があげられる。当時、女たちの多くは男に仕え、男に見られ、男によって評価される対象であった。女たちは、男に評価される客体として、男に気に入られる振る舞い方を身につけ、自らの身体を加工したのである。このことについて、小倉孝誠は、『女らしさはどう作られるか』（法蔵館、1999年、p.ⅲ）の中で次のように述べている。「歴史的に言えば、近年にいたるまで女の身体は男によって見られ、対象化されてきた。（中略）とくに、女性の身体は、さまざまな意味で男性の身体よりも歴史性や社会性を強く刻印されている」。ならば、女性たちの身体に歴史性や社会性を付与した男性の視線とはいかなるものであったのか。彼女たちの身体に向けられた視線には、どのようなジェンダー意識が存在したのだろう。

筆者は、以前、シャルルの視点や視線と読者との関係性について考察した[5]。その際、シャルルの視点は三人称小説である『ボヴァリー夫人』に読者たちを引き込むフロベールのストラテジーであること、また、シャルルの視線を通じて読者たちがストーリーを追う物語展開の仕組みを解

1　Gustave Flaubert (1821-1880) 以後、フロベールと記載する。
2　フランス語原題 *Madame Bovary*　出版年は1857年。
3　世界文学全集15　伊吹武彦訳『ボヴァリー夫人』、河出書房、1966年、p. 488。
4　ボヴァリー裁判については、山川篤著『ボヴァリー夫人研究』（風間書房、1970年）に詳しい記載がある。
5　野田（水町）いおり著『ボヴァリー夫人』におけるシャルルの役割について―視点・視線からシャルルの役割を考察する―（『人間文化研究』№12、2009年）を参照されたい。

明し、シャルルが物語の誘導（ナビゲーター）の役割を担っていることを指摘した。しかしながら、シャルルの視線に見られるジェンダー性についての考察は筆者の課題として残されていた。そこで、以下に本稿が考察の対象とする女性の身体とジェンダーについての先行研究をまとめておきたい。

アラン・コルバン[6]やミシェル・ペロー[7]らによって、「女性の身体」が歴史的考察の対象となって以来、文学においても女性の身体表象をテーマとした議論が数多くなされてきた。とくに『ボヴァリー夫人』に関して言えば、さきほど紹介した小倉孝誠が、著書『女らしさはどう作られるか』の第2章でエンマの身体に着目し、エンマを見つめる男性の視線やエンマ自身の視線を取り上げて考察を行っている。また、宮下志朗は、『読書の首都パリ』（みすず書房、1998年）や『本を読むデモクラシー』（刀水書房、2008年）において、読書によってロマンティックな夢想癖を形成し、貸本屋の熱心な顧客でもあったエンマを「本の密漁者エンマ」と呼び、読書をする女性の身体表象や、読書における性差（ジェンダー）について論じている。さらに、バルガス・リョサは『果てしなき饗宴』（工藤庸子訳、筑摩書房、1998年）の中で、エンマの身体描写の美しさについて作品の構造やフロベールの描写技法の分析を通じて論及を行い、また、ルネ・ジラールは『欲望の現象学』（古田幸男訳、法政大学出版局、1971年）において、「欲望の三角形」つまり「欲望、他者、主体」という三者の関係性におけるエンマの悲劇や身体性について言及している。しかしながら、これらの研究は、エンマの身体描写におけるジェンダー意識についての言及が十分ではなく、現在まで「男性の視線が持つジェンダー意識とそれに影響を受ける存在としてのエンマ」という視点での『ボヴァリー夫人』の考察もなされていない。つまり、登場人物の視線に着目して『ボヴァリー夫人』のジェンダー性について解明する試みは未開拓の分野なのである。

そこで、本論文では、『ボヴァリー夫人』という作品において、主人公であるエンマの身体が男たちからどのように見つめられ、評価されてきたのかを明らかにし、男たちがエンマに向ける視線の中にどのようなジェンダー意識が存在するのかを分析したい。エンマは不貞を働き、夫以外の男性、すなわち年上の愛人や年下の恋人とも関係を持っており、異なる関係性によって生み出された多角的な視線を享受する存在である。多面的なまなざしを受ける主人公を描いた『ボヴァリー夫人』は、女性の身体にむけられた視線を分析することで女性の身体を拘束するジェンダー意識を解明しようとする本論文にとって格好の材料と言えるだろう。

なお、本論文では、作家や語り手の視線については論及せず、登場人物の視線のみを考察の対象とした。具体的には、夫のシャルル、愛人のロドルフ、レオンの三人の男たちの視線の中に描

6　コルバン著『身体の歴史』（藤原書店、2010年）は、女性の身体性を理解する上で大変有益な資料である。歴史、文学、医学などの多角的な視点から女性の身体を論じている。

7　ペローは『女の歴史』（藤原書店、1996年）の中で、女性の身体について、中世、近世、近代に渡り、その時代の特徴をとらえながら、詳しい歴史的考察を行っている。

かれたエンマの姿を取り上げ、それぞれの男たちとの関係性も含めてエンマの身体描写を比較し、分析を試みる。第1章では、エンマに対するシャルルの視線の変化と関係性、第2章では、ロドルフの視線が知覚したエンマの姿、第3章では、ジェンダーロールが逆転したエンマとレオンの視線の変遷をたどりながら、エンマの身体描写を通じて、『ボヴァリー夫人』に描かれたジェンダー構造を明らかにしていきたい。

第1章　エンマに対するシャルルの視線の変化と関係性

第1章では、シャルルがエンマの身体をどのように捉えたのかについて、結婚前、結婚を意識した時、結婚後の三つに分けて分析し、エンマを見つめるシャルルの視線にどのようなジェンダー意識が隠されているのかを考察する。

1、結婚前

シャルルとエンマが初めて出会った時、すでにシャルルは結婚しており年上の妻がいた。シャルルは出会ってすぐにエンマの目に惹かれ、エンマの目の特徴を次のように捉えている。

> **彼女の中で一番美しいもの。それは目だ。茶褐色なのだが、まつ毛のせいで黒く見えた。まなざしは無邪気な大胆さで、まっすぐに見据える目であった。(p. 27)**

エンマの無邪気な視線は子どものようでもあり、「男をじっと見据える目」は女性としての規範やマナーを逸脱し[8]、エロス的なものと結びつく可能性を内包している[9]。エンマは無邪気な子どもらしさと挑発的な大人の女性の視線の両方を持ち合わせており、シャルルは両義性を持つエンマの目を「一番美しい」と捉えている。では、エンマの目以外の部分について、シャルルはどのように知覚しているのだろう。

> **シャルルは、彼女の爪の白さに驚いた。爪はつやつや光って、先が細く、ディエップの象牙細工よりも、もっときれいにみがかれ、先をまるく切ってあった。一方、彼女の手は、それほど美しくなかった。おそらく白さが十分には足りないのだろう。そして、関節のところが少し骨ばっていた。また、少し長すぎて、輪郭に曲線の柔らかみが足りなかった。(中略)白い折襟から頸筋が出ていた。髪はきれいな細い線でまん中から分け、両側の黒髪はなめら**

8　小山美沙子著『7月王政下のある女性用百科事典』(日仏教育学会第3号、1997年)に、当時の女性に求められたマナーやエチケットについての詳しい記載がある。
9　工藤庸子著『フランス恋愛小説論』(岩波書店、1998年、p. 21)に、「見ることは、対象に対する具体的な情報を集めるだけでなく、もっとエロス的なものと関わっている」との指摘がある。

かでそれぞれ一つにぴったりとくっついているようだ。分けた筋は、頭の曲線どおりに軽くくぼんでいる。髪は、耳たぶをちょっと見せ、額の両際のところで田舎の医者が初めて見るようなウェーブを作って、後ろの豊かな髷と一つになっている。頬はバラ色だった。まるで、男のように、胸のところの二つのボタンのあいだにべっこうの眼鏡をさしていた。（pp. 33-34.）

上記の長い引用に示された通り、シャルルの視線はエンマの身体をなぞり「まるでエンマの肌を撫でるかのように[10]」輪郭、色彩、光沢などを敏感に、そしてその細部まで克明に描写している。しかし、シャルルのまなざしが捉えるエンマの身体は、指と顔とその構成要素だけであり、胸や背中や腰や肢などの身体全体の輪郭を捉えてはいない。おそらく愚直なまでに純粋で真面目なシャルルの視線は、慎み深く、恥ずかしそうに、伏し目がちにエンマの姿を捉えたため、エンマの全体像を把握するまでに至っていないのではないか。これは、子どものような、あるいは挑発的な大胆さでシャルルを見据えるエンマの視線とは対照的である。

では次に、シャルルがエンマとの結婚を意識した時、シャルルはエンマの身体をどのように捉え、描写しているのかについてみていこう。

2、結婚を意識した時

シャルルの最初の妻エロイーズは、シャルルが若いエンマに惹かれていくのを見逃さなかった。エロイーズは、シャルルがエンマの父であるルオーじいさんの往診に行くたびに、「本当は、あのお嬢さん（エンマ）に会いに行くのだろう」とシャルルを責め立てた。シャルルは妻に遠慮して往診に行くのを控えていたのだが、そのような折、突然に妻は亡くなり、喪が明けるとすぐにシャルルはルオーじいさんの家に出向いていった。

ある日、彼（シャルル）は3時頃に（エンマの家を）訪ねてきた。（中略）エンマが窓と暖炉の間で裁縫をしていた。あらわな肩の上に、細かい汗のしずくが見えた。（pp. 34-35）

田舎風にエンマは飲み物をすすめた。（中略）グラスはほとんど空なので、彼女は反り返って飲んだ。仰向いて、唇を尖らせ、頸をのばしながら、口の中に何の感じもないのをおかしがって笑うと、舌の先が美しい歯の間から出て、グラスの底をペロペロなめた。（pp. 36-37）

シャルルが結婚を意識した後、シャルルの視線は明らかに変化している。慎み深く控え目で、

10　小倉孝誠『女らしさはどう作られたのか』法蔵館、1999年、p. 99。

エンマの全体像さえ捉える事ができなかった視線とは大きく異なり、「あらわな肩の上の汗のしずく」や「ペロペロ舐める舌」など、シャルルの視線がエンマの官能性を見いだしていることが読みとれる。真面目で実直な男のシャルルでさえ、結婚する女を見る視線はエロティックに変化するのである。シャルルが学生時代に愛人にでもできそうなお針子に向けた視線も、年上の妻エロイーズに向けた視線も官能的なものではなかった。シャルルがエロティックな視線を向けた相手はエンマただ一人であった。この点からも、シャルルの誠実な性格を見ることができるだろう。では、結婚した後、シャルルはエンマにどのような視線を送ったのだろう。

3、結婚後のシャルルの視線

次の引用は、結婚した後に、自分の横で眠るエンマの目を見た時のシャルルの様子である。

> **こんなに近くで見ると、妻の目は、瞬きをする時などはとりわけ大きく見える。影になると黒っぽく、明るいところでは濃い青色に、次々に色の層になって、奥の方はあくまでも濃く、エナメルのような表面に近付くにつれて、色は薄くなっている。(p. 45)**

本来、エンマの目の色は茶色である。しかしながら、シャルルによって知覚されたエンマの目は、黒、濃い青、色の層、薄い青…と、現実の色とは異なる色彩の重層性で描かれている。もちろん光の具合で色彩は変化するだろう。エンマの目の色が変化するのは、シャルルがエンマの姿を多角的に発見し、エンマの多面性に気が付いたと推察することも可能かもしれない。しかしながら、「シャルルには初めて会った時と違う彼女の姿、または、さきほど別れたばかりの彼女の姿と違う姿は、頭に浮かばなかった。[11]」という引用が示すように、シャルルにとっては初めて会った時とほんの一瞬前のエンマの姿が全てであり、それ以外のエンマの姿を思い出すことさえできていないことを考えると、シャルルがエンマの多面性を発見したとは考えにくい。さらに、結婚前には、「彼女（エンマ）の中で一番美しいもの、それは目だ」と述べて、エンマの身体的特徴を象徴化していたエンマ目の色が、見る角度や光線の影響があったにせよ、このようにさまざまに変化するのは不自然である。したがって、エンマの目の色がくるくる変わるのは、シャルルが対象であるエンマの本来の姿を把握せず、主観的に、つまり自分の見たいように見ていることを表しているのではないかと筆者は推測する。しかし、なぜ、シャルルの視線がそのように変わったのだろう。その理由は、次の一文に説明を求めることができるだろう。

> **シャルルは、心からうちこんだこの美しい女を、もう一生自分のものとすることができたの**

11 *ibid.*, p. 35.

だ。彼にとって、世界は妻の下着の手触りの柔らかなあたりに限られたようなものだ。何度でも妻の顔が見たかった。（p. 63.）

シャルルにとって、エンマとの結婚は大きな幸せであった。シャルルの胸は喜びにあふれ、幸福をかみしめていた。それは「この女をもう一生自分のものとすることができた」からである。エンマが「妻」になると、シャルルはエンマのことを「自分の所有物」と考えていることが、上記の引用からも明らかである。先ほど述べたように、シャルルはただでさえ対象を正確に捉えることができていない。それに加えて、シャルルにとってのエンマは、もはやエンマ自身ではなく、夫に所有される「妻」になったのである。そのため、シャルルはいよいよエンマのことを主観的に捉え、エンマ本来の姿を見失っていると考えることができるだろう。

さて、ここまでエンマに対するシャルルの視線について分析してきた。シャルルのまなざしは、結婚前、結婚を意識した時、結婚後に大別でき、エンマとの関係性によって変化している。結婚前はまじめな男の控え目で客観性を持ったまなざしであり、結婚を意識した時は、とりわけエンマの官能的な側面をとらえた視線を送っていた。そして、結婚後は、所有者としての主観的な視線をエンマに注いでいる。特筆すべきは、結婚後のシャルルの視線がエンマ個人ではなく、「妻」を眺めるまなざしへと変化していることである。これは、エンマを「個」ではなく、類型化された「妻」と見なしていることを表しており、それがシャルルの視線の変化につながったのであろう。

しかし、エンマは、自分がいわゆる普通の妻、すなわち夫から生活を保障され、その代わりに家庭の天使として夫を助ける当時の一般的な妻として類型化されることが不満でならない。エンマは少女時代に修道院で読んだ本の中にあるような、湖上の竪琴、白い羽飾りをつけた騎士、ヴェニスの入江やゴンドラの船子などのロマンティックな生活を夢みていた。しかし、シャルルはそのようなエンマの内面性には気がつかず、エンマに対し中産階級の理想的な妻としての視線を送りつづけたのである。その結果、エンマは夫に嫌悪感を持ち、淪落の恋に落ちていく。エンマをどのように捉え、どのような視線を送るか。シャルルはエンマの本質の捉え方に失敗したのであり、そのことが悲劇的な結末をもたらしたと考えられる。

第２章　ロドルフの視線が知覚したエンマの姿

次に、第２章では、打算的で女好きなブルジョア男であるロドルフの視線がエンマをどのように捉えたのか、そしてその視線にどのようなジェンダー性が隠されているのかについて分析していくことにする。まずは、ロドルフが最初にエンマを見た時の印象からみていこう。

1、初めて会った時

かわいい女だな。きっと（結婚生活に）退屈しているに違いない。都会に住みたい、毎晩ポルカを踊りたいと。かわいそうな女！まな板の上で、鯉が水を恋しがるように、あの女も恋に憧れているにちがいない。（中略）それにしても、あの女はこちらの心の奥まで錐のように入ってくる目をしている。それにあの青白い色！（中略）おれは青白い肌の女が大好きだ！（p. 142）

引用にある通り、ロドルフもシャルルと同様、エンマの目に着目している。第１章で述べたように、シャルルは、無邪気にそして大胆にじっと見据えるエンマの目を見つめ返すことはできず、思わずうつむいて視線を下方にやり、エンマの手と髪型ばかりを見ていた。しかし、ロドルフはエンマを見つめ、エンマの全体のイメージをとらえ、すぐさまエンマの満たされない感情を読みとっている。しかし、一方で、「心の中に錐のように入ってくる目」に対しては無意識的に警戒心と違和感を抱いたのだろうか、すぐに視線をそらし、青白い肌に興味を移し、「大好きだ」とエンマの身体に評価を下している。当時、青白い肌は「死」のイメージと結びついてロマンティシズムをかきたてるため、男性たちの憧れの対象であった[12]。つまり、ロドルフには当時の男性たちに共通の女性に対する俗的な嗜好―上品さ、はかなげな雰囲気、肌の白さ―などがあり、その好みとエンマの外見が合致したため、エンマに興味を持ったのである。ロドルフは出会ったその最初の瞬間から、エンマに固有の特性よりもむしろ、エンマの持つ男性が好む外形的側面に惹かれているのである。また、ロドルフはエンマの他の部分にどのような視線を送っているのだろう。

身をかがめたはずみに、彼女の服は広間の石畳の上、彼女のまわりに広がった。そしてエンマが腰をかがめ、両腕を開きながらちょっとよろめくと、服地のふくれあがったところが胸の曲線に沿って、ところどころほころびた。（p.158）

彼は、エンマがあの服装で広間にいるさまを思い浮かべた。そして服を脱がしてみた。（p. 158）

ロドルフの視線は、衣装の上から腰、胸の曲線などのエンマの身体の輪郭をなぞっており、頭の中で服を脱がせて裸体を想像するなど、ロドルフの視線には男性の性的な好色性が感じられる。

12　Michel Pastoureau *Bleu. Histoire d'une couleur*（ミシェル・パストゥロー著『青の歴史』）（松村恵理、松村剛訳、筑摩書房、2007年）

これは第１章で述べた真面目な田舎医者であるシャルルの視線と対極的である。打算的で女好きのブルジョア男とシャルルの視線の違いは、エンマに向けられた誠実さの違いである。出会った時にエンマに向けられたロドルフの視線からも、二人の不倫の恋が不毛であることが推察できるだろう。

２、恋の最中

さて、エンマはシャルルを裏切り、ロドルフと不倫の関係を結ぶ。より親密さを増した関係性の中で、ロドルフはエンマにどのような視線を送っているのだろう。

彼女（エンマ）は美しかった。こんなに純真な女をわがものにしたことはない。（中略）このような新しい恋は、自尊心と肉欲を同時に満足させるものだ。（p. 169）

エンマは、セットした髪が乱れ、目がぼうっとしている。彼（ロドルフ）に全く分からないのは、単なる色恋のことで、女がこんなに混乱してしまうことである。（p. 172）

引用からも分かるように、ロドルフの喜びはエンマを純粋に愛する恋心からではなく、エンマを自分のものにしたという精神的、肉体的満足によるものである。また、ロドルフは、恋愛を「単なる色恋」と割り切っており、エンマを見るまなざしの中に誠実さは感じられない。ロドルフにとってのエンマは単なる遊び相手であり、エンマは彼の自尊心と肉欲を満足させる道具にしか過ぎないのである。そして、ついに、ロドルフはエンマについて次のような評価を下す。

エンマはやはり普通の色女と同じだ。新しさの魅力は着物のように少しずつ脱げ落ち、同じ形と同じ言葉を持つ情熱の永遠の単調さをあらわに示してきた。（p.178）

ロドルフは、エンマをいわゆる女性一般のステレオタイプな価値意識の中に位置づけ、「同じ形、同じ言葉を持つ女性」として類型化している。個人の特性や内面性には注意を払わず、根拠もなく相手を自分の価値観の中で類型化するのは「偏見」である。そのため、ロドルフのエンマに対する視線には、「どの女も同じだ」という女性に対する男性優位の歪んだジェンダー意識が垣間見られる。では、エンマはロドルフに対して、どのような振る舞いをしたのだろう。

彫金師のように丹念に爪を磨くのもこの男（ロドルフ）のため、肌にコールドクリームを塗り、ハンカチにパチュリー香水をふりかけておくのもこの男のためだった。腕輪や指輪や頸飾りを身に付けた。ロドルフが来ることになっている時は、青いガラスの大きな花瓶二つに

バラをたくさん活けて、主君を待つ愛妾のように、部屋と身なりを飾った。(p.185)

エンマの振る舞いを見てみると、顕著な主（ロドルフ）従（エンマ）関係が見られる。エンマの立場が弱いのは、シャルルとの日常生活に辟易しており、ロドルフとの時間がエンマにとっては必要不可欠であるからである。一方、ロドルフにとってのエンマは、あくまでも恋の戯れの一つであり、エンマほど恋にのめり込んではいないため、必然的にロドルフの優位が形成されている。ロドルフの優位は、ロドルフとの不倫の只中にあるエンマの姿を描写した一節からも窺い知ることが出来る。

このころほど、ボヴァリー夫人が美しく見えたことはなかった。彼女は歓喜と感激と成功から生まれる得もいわれぬ美しさ…気品と境遇の調和にほかならない美しさを持っていた。肥やしや雨や日の光が花を育てるように、彼女の欲望、彼女の悲哀、快楽の経験、つねにわかわかしい夢の数々が次第に彼女を育んだ。そして彼女は、その天性に満ち溢れて、ついに花開いた。瞼はうっとりと消え入るような、果てしない恋のまなざしのためにわざわざ刻まれているように見えた。激しい息遣いは小さい鼻孔をふくらませ、むっちりとしたくちもとにつりあげた。光がさすと、すこしばかりの黒い産毛がその口元に影を作った。束ね髪が頸筋に垂れているところは、まるでしどけない風情を描くに巧みな芸術家の仕業のようにも思われた。髪は日ごとに不義の褥に解けるままに、無造作に、重い束に巻かれていた。声は、いっそう柔らかな抑揚を帯びてきた。身体もまたそうであった。見る人の身体にしみとおるような霊妙なものが、彼女の服や襞や土踏まずの曲線からさえ発散した。(p. 170)

上記の長い引用には、エンマの雰囲気、瞼、唇、頸筋、髪の毛から息遣いにいたるまで詳細な描写がなされ、不倫をして不義の恋にのめりこむほどに美しくなっていくエンマの姿が克明に記されている。しかし、『ボヴァリー夫人』のテクストには、「エンマと不倫の関係を結んだロドルフが、男性としての魅力を増していった」という記載は一切認められないため、上記の「恋をすることで女はきれいになる」という内容は、男性に影響を受ける存在としての女性の姿を描いていると言える。つまり、男性に影響を受けて美しくなっていくエンマの姿は、男女間のジェンダーロールが平等ではないことを示しているのである。

ともあれ、ロドルフは、「田舎にはもったいない都会風の女」、「中産階級の人妻」、「単なる恋の遊び相手」という具合に、エンマを一般化し、ラベリングして捉えている。エンマに向ける視線はロドルフの主観的なものであり、エンマを自分が設定した枠組みの中に位置づけている。そのため、エンマがロドルフの形成した枠組みから逸脱し、ロドルフとの真剣な恋を求めようとすると、エンマに対する思いは劇的に変化し、恋心は消え去ってしまう。つまり、ロドルフの視線

は、自分の価値観の中に女を当てはめようとする身勝手な視線なのであり、私たちは、ロドルフの視線の中に、女性に対する男性の優位という歪んだジェンダー意識を読みとることができる。

第３章　「男性化」したエンマとレオンの視線の変遷

第３章では、エンマと年下の愛人レオンの視線について考察する。筆者は、以前、エンマの「男性化」について論考した 。「男性化」とは、女であるエンマが、男のように振る舞うことである。エンマのしぐさ、言葉、服装などには、男性的な振る舞いが見られる。とくに、エンマはレオンの前では「男性化」し、男女のジェンダーロールが入れ替わり、レオンを手なずけ、精神的にも肉体的にも支配している。このような関係において、エンマはレオンからはどのように見られ、レオンに対し、どのような視線を送っているのだろう。

１、理想化した女性像

恋愛の初期において、レオンはエンマに夢中になり、エンマに賛美のこもった熱っぽい視線を送っている。

> **はじめてレオンは女の優雅さという言葉に表せない微妙なものを味わった。こんなに美しく品のある言葉づかい、こんなにつつましい趣味の衣装、まどろむ鳩のようなこんなにも愛らしい挙止に出会ったことがなかった。彼は、エンマの興奮する魂とスカートのレースにうっとりした。しかも、この女性は「上流夫人」で、その上、人妻ではないか！これこそ、恋人に相応しい女性ではないか！（p. 221）**

レオンのまなざしはエンマを讃え、幸福に満ち溢れている。エンマの愛らしさ、エンマの品性、振る舞い全てがレオンにとって大きな喜びであり、その喜びは彼がはじめて知った「女の優雅さ」によるものである。しかし、レオンはその優雅さを言葉に表すことができない。「言語化できない微妙なもの」にこそ幸福と喜びを感じるレオンの精神性からは、ある種の未熟さや不確かさが感じられる。一読すると、たしかにレオンはエンマを認め、エンマに敬意さえ表しているかのように見えるが、「これこそ、恋人に相応しい女性である」の一文が示すように、レオンは、結局自分の理想化した恋人像をエンマに当てはめ、勝手に喜んでいるだけなのである。レオンがエンマを自分のイメージ通りの恋人として理想化しているのは、次の引用からも分かる。

13　野田（水町）いおり『ボヴァリー夫人』をめぐる一考察　―「男性化」するエンマに焦点をあてて―（『人間文化研究』№14、2010年）を参照されたい。

エンマは封建時代の城主の奥方のように胴がすらりと長かった。また、「バルセロナの青白い女」にも似ていた。が、わけてもエンマは天使であった。(p. 273)

レオンは、細い腰、すらりとした容姿、男性の興味を惹く「青白さ」など、エンマの中に当時の男性たちが好んでいた「女らしさ」を見いだし、エンマを称賛している。一方で、レオンは、エンマのことを肉体と欲望（性欲）を持たない天使であるとも考えており、エンマに対するレオンの視線は両義的である。エンマを称賛する一方で、エンマに対し男性的な嗜好と清純な理想像の両方を求めており、実は、身勝手な要求をしているのである。しかし、エンマはレオンの要求のその双方に応えられる理想の女性だった。そこで、次は、エンマがレオンに対し、どのような視線を送ったのか見ていこう。

2、「見られる客体」から「見る主体」へ

ここでは、「見る主体」となったエンマと、徐々に「男性化」していくエンマを見るレオンの視線を分析していく。

レオンはエンマの前の床に座った。そして、膝の上の両肘をつき、顔をさし出すようにして、エンマの顔を眺めるのであった。エンマはレオンの方にかがみこみ、息が詰まるようにささやいた。
「あら、動かないで。静かにして。私をじっと見て。あなたの目から、なんだか楽しくて甘いものが出てきて、私はとてもいい気持ち」(p. 275)

エンマは自分を見つめるレオンの前にかがみこみ、レオンのまなざしの中に、自分に恋焦がれ、夢中になっている男の姿をみとめ、レオンの視線が持つ甘美な力を感じている。これまでエンマは、シャルルやロドルフなどの男性から「見られる客体」に過ぎなかった。しかし、レオンとの関係においては、自分を見ている男を見つめ返しその視線を「楽しくて気持ちいい」と評価するに至っている。そして、とうとうエンマがレオンを見つめる主体へと変化する。

男がこれほど美しく見えたことはかつてなかった。得もいえない純心さが彼の態度から感じられる。彼は反り返った細長い睫毛を伏せていた。肌のなめらかな彼の頬は、彼女の肉体を得ようとする欲望のために赤らんだ－と彼女は思った。そして、エンマはその頬へ唇を持ってゆかずにはいられない欲望を感じた。(p. 288)

「赤らんだ－と彼女は思った」という一文は、エンマの「男性化」が完全なものでないことを

表している。つまり、レオンが赤らんで見えたのは、あくまでエンマの主観によるものであって事実ではなく、「赤らんだ」かどうかの判断は、男であるレオンの側にあるからである。

しかし、エンマは、女性に特徴的とされていた頬を赤らめる行為を、男性であるレオンの中に見いだしていた。そして、その男を「美しい」と評価し、細長い睫毛、なめらかな肌、頬、唇…とレオンの身体を視線でなぞっている。まるで、シャルルやロドルフの視線が、エンマの身体を撫でるようになぞり、評価してきたように。この時、たしかにエンマは「男性化」し、男を見る主体に変化しているのである。では、レオンはそのようなエンマをどのように見ているのだろうか。

エンマは過激、大食い、淫蕩になった。（中略）レオンは、ただ、エンマの気に入りたいために、エンマのどんな趣味も受け入れた。エンマはやさしい言葉とレオンをとろけさせるキスを心得ていた。（p. 282-285）

エンマは荒々しく着物を脱ぎ、コルセットの細紐を引き抜いた。（中略）それからまとっているものを一度にかなぐり捨て、青ざめて、言葉もなく、興奮にふるえて、レオンの胸にとびかかった。（p. 289）

男をとろけさせるキス、そして自らコルセットを外し、興奮にうちふるえて男に飛びかかる行為は、当時のジェンダー規範からは大きく外れている。この引用からも、エンマが「男性化」し、男女のジェンダーロールが逆転しているのが分かるだろう。エンマの「男性化」は、女性の希望や欲求（とくに性的欲求）を否認していた七月王政期の社会的なディスクールに対する、あからさまでスキャンダラスな挑戦とも言えるだろう[14]。

やがて、エンマのレオンに対する要求はエスカレートし、自分の趣味や好みを押し付けるようになる。カーテンの色、着用する服の生地、言葉づかいのみならず、エンマが憧れたルイ13世のように髭をはやすことも要求し、レオンの身体に注文をつけるようになった。レオンは、エンマに会わない時間に何をしていたかを細かく報告せねばならなかった。レオンは次第にエンマから支配されることが恐ろしくなり、エンマへの愛も徐々に冷めてしまう。男に支配されてきた女性に対しては、男に優しく愛情を注ぐことが社会通念上求められているのにもかかわらず、男が女性に支配されるとなると、とたんに恐怖を感じ、愛情が冷め、エンマを拒否さえするレオンを通じて、七月王政期における男性優位の歪んだジェンダー構造が見えてくるだろう。やはり、女は視線を享受する客体であり、視線を送る主体にはなりえないのである。

14　松澤和宏著『『ボヴァリー夫人』を読む』、岩波書店、2004年。

ここまで、「男性化」したエンマの視線と、「男性化」したエンマを見るレオンの視線をみてきた。理想化した女性像をエンマの中に見いだしていたレオンにとって、エンマの「男性化」は許容できなかった。フロベールは、たとえジェンダーロールが入れ替わったとしても、それは一過性のものであり、七月王政のフランス社会に深く根付いていた男性優位のジェンダー意識における男女の主従関係に何ら影響を及ぼさないことを、エンマの「男性化」によるジェンダー的転倒の結果、恋の終焉が訪れるというストーリーで暗に示そうとしているのかもしれない。

おわりに

本稿は、主人公であるエンマの身体が、男たちからどのように見つめられ、評価されてきたのかを明らかにし、男たちがエンマに向ける視線の中に、どのようなジェンダー意識が存在するのかを分析することを目的としていた。

エンマを見る男たちのまなざしを分析してみると、夫であるシャルルも、愛人のロドルフもレオンも、エンマ個人を見ていないことが分かる。エンマの身体は、シャルルにとっては「妻」であり、ロドルフにとっては「恋の遊び相手」、「都会の女」であり、レオンにとっては「理想的な天使のような女性」であった。本来、エンマの客体は唯一固有のものであるにもかかわらず、このようにさまざまな見方をされるのは、男たちがエンマの身体を自分たちの見たいように見ていたからである。彼らは身勝手な視線をエンマに身体に向け、そしてエンマを類型化した女性の価値基準の中に位置づけようとしている。これは、男性の視線による女性の身体の規範化であり、男性の視線による女性の拘束化である。つまり、男たちの視線は、エンマとの関係性がそれぞれ異なっていても、七月王政期の男性優位の社会規範を体現していると言えるのである。

しかしながら、エンマはその「男性たちのまなざしによる拘束」から逸脱しようとする。たとえば、シャルルの「エンマ＝妻」という視線から逃れるために、エンマは妻としての役割を放棄し、規範を外れて不倫をする。また、ロドルフの「エンマ＝恋の戯れ」という身勝手で不誠実な視線に対しては、本気の恋や純粋な恋を求め、駆け落ちを提案している。さらに、レオンの「エンマ＝理想の女性・天使」という窮屈な視線には、「男性化」をしてジェンダーロールの逆転を引き起こし、レオンを手なずけ支配しようとさえしている。多くの女性たちが、男性たちの視線にさらされ、「見られ、評価される客体」にしかすぎなかった社会風俗の中にあって、エンマは自らを類型化しようとする男たちの視線をただ受容するだけの女ではなかったのである。

ところが、エンマの試みは全てが失敗に終わる。男たちは、エンマに身勝手な視線を送り続けてエンマの身体を拘束するものの、エンマがその視線の拘束から逸脱すると、エンマに対する賞賛は消え、愛情さえも冷めてしまうのである。つまり、男たちのエンマに送る視線は、七月王期政当時の男性優位の価値意識、歪んだジェンダー構造を見事に体現していると言えるだろう。

しかしながら、私たちは、男のまなざしによる支配や束縛から逸脱することを試みるエンマの

姿に、当時の社会が有していたジェンダー的諸問題に対して従順に従うのではなく、自分の望むように生きたいと願い、それを具現化しようと自らの意思で行動する意志をみることができる。フロベールは、「今、このとき、フランスの多くの村々でボヴァリー夫人は泣いている」[15]と書簡に綴り、家父長制の強い社会規範にとらわれ、自己解放を求めることがタブーとされた女性たち、特に地方の中産階級の女性の鬱積した感情を『ボヴァリー夫人』の中で描き出している。フロベールは、エンマを通じて地方の中産階級のブルジョア女性たちの閉塞感を表現しているが、その男性優位のジェンダー規範に由来する閉塞感は、本稿の試みであるエンマの身体に向けられた登場人物の視線を分析によっても見いだすことができるだろう。エンマは、男性たちの視線がもたらす閉塞感から逃れようと葛藤し、七月王政期の社会通念や男性優位の視線の拘束からの解放に挑戦した女だとも言えるのではないか。

本稿では、『ボヴァリー夫人』の登場人物、とくにシャルル、ロドルフ、レオンの３名の視線に焦点を当てて分析をおこなったが、『ボヴァリー夫人』に描かれたエンマの身体描写の中には、作者であるフロベールの観念の中にある女性観やジェンダー意識が、厳然たる事実として結実している。女性の身体を描写する際の、男性作家であるフロベールの意識的、無意識的なジェンダー意識の考察は、『ボヴァリー夫人』のジェンダー構造を解明する上で重要な手掛かりとなりえるだろう。これは、作者、語り手、登場人物という3つの視点がどのように交差するかという問題をも新たに提起する。これらについては筆者の今後の課題とし、稿をあらためたい。

15　1853年8月14日、ルイーズ・コレ宛ての書簡。「地方風俗」という『ボヴァリー夫人』の副題について、自身の見解を表したものである。